

令和元年度環境経済委員会行政視察報告書

環境経済委員長 川合 隆史

【視察日程】 令和2年1月16日（木）

【視察委員】 委員長 川合 隆史
副委員長 鷺見 隆仁
委 員 森山 和博、蛭田 浩文、酒井 伸二、
白鳥 誠、盛田 眞弓、石橋 毅
随行員 中嶋 健、高橋 麻理子、西森 照泰

【視察地及び調査事項】

- 1 株式会社メックアグリ
（1）農業分野における企業参入について
- 2 観光いちご園エーアト・ベーレ
（1）高収益作物の導入について
- 3 本市農業の現状と課題について

【視察報告】

調 査 目 的	本市における農業分野への企業参入の事例及び高収益作物の導入事例について現地視察するとともに、本市農業の現状と今後の課題等について調査する。
視 察 概 要	1 調査項目 (1) 農業分野における企業参入について（現地視察） （視察先：株式会社メックアグリ） (2) 高収益作物の導入について（現地視察） （視察先：観光いちご園エーアト・ベーレ） (3) 本市農業の現状と課題について 2 説明者 (1) 株式会社メックアグリ 代表取締役社長 同アドバイザー (2) 観光いちご園エーアト・ベーレ 代表 (3) 千葉市経済農政局農政部長 3 現地視察の様子 (1) 株式会社メックアグリ（緑区平川町） ①ハウス外観  ②施設内部（収穫したトマトを糖度別に選別している） 

(2) 観光いちご園エーアト・ベーレ (緑区大高町)

①施設内の休憩所



②施設内部 (イチゴの高設栽培)



(3) 本市農業の現状と課題について (於: 農政センター)



4 主な質疑 (□: 質疑、■: 答弁)

(1) 農業分野における企業参入について

□ 参入場所として、本市を選んだ理由は。

■ 今の場所にもともと (株) オスミックが試験農場を開設しており、
周辺に土地も多かったため、本市という話になった。

□ 今後、全国展開は考えているのか。

	■ 全国展開というよりは、強いマーケットである東京近郊で展開していくことを考えている。 □ 昨年の台風による影響は。 ■ ハウス躯体の被害はほとんどなかったが、停電や断水、浸水による被害はあった。ハウス内部の環境は自動制御となっているため、水やりや温度調節ができず、手動でフェンスを開けて風を取り入れていた。また、糖度別センサーが使えなかったため、収穫できたトマトはノーブランドトマトとして販売せざるを得なかった。 □ 全国的に高糖度トマトの需要は高まってきていると思うが、競合他社はいるのか。 ■ 代表的なものとしては静岡県のアメーラトマトや、北海道のJファームがあるが、通年出荷をしているところはない。また、一般の高糖度トマトは「水しぼり栽培」によって作られるため、皮が固いが、自社で栽培しているものは皮が柔らかく、品質から見ても競合他社はいないと考えている。 □ 水耕栽培やロックウール栽培ではなく、土を利用している理由は。 ■ 土で栽培しないとトマト本来の味がしないと考えているため、土にこだわっており、化学肥料は一切使用していない。子供や妊婦にも安心して食べてもらえるところが他社との差別化に当たると考えている。 (2) 高収益作物の導入について □ 観光農園として、何か工夫しているところは。 ■ 観光目的でハウスを建設したため、当初から高設栽培を導入した。また、イチゴ狩りが終わってからもくつろいでもらえるように休憩所を整備したり、施設内を清潔に保ったりするなどの工夫をしている。 □ 今後の事業展開についてどう考えているか。 ■ 2、3年前に規模を拡大したばかりであるため、安定した経営の維持と、一緒にやっている家族を経営者として育てることを考えている。一気に事業展開して成功した例はあまりないので、事業を開始して、資金の返済のめどが立つなど落ち着いた段階で次の事業展開をしていくことが必要だと思っている。
--	---

	□ イチゴのアイスや最中といった加工品も販売しているが、6次産業化についての見解は。 ■ 自家製ではなく、知り合いの酪農家に委託して製造してもらい、販売している。ある程度の数を作らなければコストを下げられず、また、それなりの数を作れば営業がいないと売り切ることではできないため、中途半端に始めるのは避けた方がいいと思う。自分の場合は、あくまでお客さんに満足してもらうためであり、利益は考えておらず、イチゴ狩りを終えた人が、暑くなったらアイスを食べる時間を過ごしてもらえるように、というくらいに考えている。あまり手広くやってしまうと、本業である農作物の生産がおろそかになってしまうため、自分はいくまで農家だというスタンスでいる。 □ 千葉市に対する意見・要望はあるか。 ■ 市内にたくさん農園ができて、千葉市と言ったらイチゴ狩りということになるのが一番いいことだと思う。都心からも1時間程度で来られるので、観光には向いている地域だと思う。 要望としては、県の補助事業を使えるようにしてほしい。千葉市は政令指定都市のため、県の補助が受けられないが、市からの補助金だけでは十分な農業はできないため、県の補助も受けられるようにしてもらいたい。また、数は少ないが、各地域に農家の後継者もいるので、そうした人たちをバックアップしてってもらいたい。新規就農者への支援については、ある程度資金面で余裕があり、やる気がある人たちに研修を受けてもらい、家族が養える農業を目指す人を増やせるよう、少しハードルを上げた方がいいと思う。 (3) 本市農業の現状と課題について □ 新しい「千葉市農林業成長アクションプラン」はいつ頃示される予定なのか。 ■ 次の第1回定例会では、令和2年度の予算で行う事業については示すことができるが、令和3年度、同4年度に行う事業を含めると今年度末になると見込んでいる。 □ 販路拡大・ブランド化の支援体制が不十分との認識とのことだが、このことについての見解は。 ■ 例えば市内で生産しているのがトマトしかなければ、ブランド化も比較的簡単ではあるが、本市では様々な農産物を作っているため、そのうちのどれか一つを取り上げてブランド化していくというより
--	--

	も、生産者、事業者、行政が一体となって、本市がおすすめできる農産物だとPRする認定制度を考えている。今後も、市民だけでなく市外の人からも選んでもらえるようなマーケティング方法を考えていく。
委員の所感	(1) 農業分野における企業参入について □ 大企業が初めて農業事業に参画したことで、資金面や取扱商品等を含めて、生産・販売ができるのは良いことであり、続く企業が出てくれば千葉市の農業も活気づくと思う。いかに他企業に農業事業に参画していただくためのプレゼンテーションができるかが必要と考える。事業用の土地をどのように提供できるか、休耕畑や休耕田も含め地権者と協議し、それぞれがウイン・ウインの関係を構築できる方策の手助けを本市農政部が担えることが重要であると考えている。小規模生産農家とどのように連携することができるか、ナンバー1の野菜作りも必要であるが、千葉市だからできるオンリー1の野菜の生産・販売が重要であり、そのための方策を農政部が生産農家と連携することが必要だと考える。既存の農業経営者等で、農地の活用について手をこまねている方々と交流・連携もしていただければと期待している。 □ 太陽光利用型環境制御ハウスによる通年栽培可能な高機能環境システムで、ハウス内の環境を一定に保つのに細心の注意を要すると気づかされた。昨年の台風襲来時には危機的状態を余儀なくされたであろうこともうかがえた。糖度を計測しながら仕分けする作業は、ある程度人の目で傷や形の選別を行ってから、糖度を測る機械に流されており、すべてが機械化されていないところに少しほっとした。確かにトマトが甘いことに越したことはないが、通常の値段よりも高いトマトを誰もが買おうとするものでもないと感じた。値段が高ければ、安くなってから、あるいは無ければ無いで構わないと最初から手に取らない消費者も少なくないと思う。より選ばれる高糖度トマトの栽培は、販売先・流通などの販路拡大も課題があると感じた。 □ 法人の農業参入の事例は大変興味深いものだった。農業参入を検討している法人へのアピールの他、今回の事例のように、希少価値のある産品など、考えられるビジネスモデルを考案し、オファーしていくような取り組みがあっても良いのではと感じた。今後の法人参入の積極的誘致、それに伴う就労、雇用環境の向上などに期待したい。 (2) 高収益作物の導入について □ 数十年前に、きちんとした生活がしていけるビジネスとしての農業

	を考え、観光イチゴ園を開園し、現在まで運営されていることは素晴らしいと思った。今後の本市の近郊農業のあり方として、大変勉強になった。これから農業を考えている起業家や若者にこのビジネススタイルを広く知っていただき、千葉市の魅力として発信し、より農家の方々の暮らしがよくなるような市政をしていかなければと感じた。 □ イチゴ観光農園として、素晴らしい観光農園であった。園主は、農政センターと連携して、時間をかけて現在の観光農園ができてきていると考える。他農業家の方々が取り組めるステージをどのように提供できるか、農政部と今一度再考する必要がある。リピーターが増えるためにどのようなことをすればいいのか、常に考えており、多品種を取り扱うことで、切れ目なくお客様に来ていただける環境を作っている。家族および数名の雇用を活用しているが、年間を通して重労働な環境でもあったと感じた。 □ 特別なPRはしていないとのことだが、リピーターや口コミでの来客が多いのは、来園者に少しでも長く滞在して楽しんでもらいたいという園主の姿勢にあると感じた。あまりうるさいことは言わず、イチゴの摘み方や時間制限も来園者の良心に任せているところが、お互いの信頼をもとにしていて好感を持てた。イチゴ農家の1年の流れなど知ることもでき、家族や知り合いと訪れたいと思えた。政令市では県の補助金を受けることができない、千葉市だけの補助制度ならもっと予算を確保してもらわないと、との話は切実さを感じた。 □ 東京圏の近くに位置する千葉市地域には、観光農業が体験できると、もっと知っていただけるようエリアで取り組みを広めていけば、イチゴの観光農園はこの地域と、リピーターを確保でき、他の農作物の耕作地にも活気がでてくるのではないかと考えた。千葉市農政も、観光農園を、個々の農園・農業への支援だけでなく地域として、活性化ができるような取り組みが更に必要である。 (3) 本市農業の現状と課題について □ 高齢化、担い手不足、販路先が少ない、ブランド化品目がない等、本市の現状は理解した。本市の生産農業家と農政部が一体化していない状況にあると感じた。現状把握はできているが、生産農家にその旨が届いていない気がする。 □ 市内農家数が減少し、農業の担い手も不足している。現状の課題を解決するための法人の農業参入を加速化し、農業の成長産業化を図り、農業の成長・発展へ向け新たな行動計画を策定すること。農家の
--	--

	支援はどう位置づけられるのか、ますます衰退していくのではないかと危惧の念を抱いた。農林業については、これまであまり認識していない分野だったと思う。現状や課題についてもっと注目して、取り上げていくことの必要性を感じた。 □ 農政部としての近年の取り組み、農林業の現状・課題の分析から新たな行動計画を策定されることが示された。千葉市の農業には大きなポテンシャルがあるものの生かされていないとの指摘が長くあり、各農作物のブランド化に取り組まれてきているが、今後は千葉市農業地域について、市民が知るための体験の場などが必要だと強く思った。 また、環境に配慮した循環型農業をうたうなど、千葉市農業自体のイメージづくりが必要と考える。例えば、一般的な林業においては、私有林等の整備で間伐された木材を循環利用できる取り組み等があるが、千葉市内の森林の環境整備で循環型林業が出来るなど、今後はスキームが求められるのではないかと。循環型農業としては、他都市の事例で、JA岡山の「瀬戸内かきがらアグリ」の取り組みがあり、本市も参考にすべきだと思う。
--	---